

機工協情報誌

JASEA GUIDE

ジャシアガイド 60号

発行：一般社団法人 日本自動車機械工具協会
流通部会
本部：〒160-0022
東京都新宿区新宿 7丁目23番 5号
Tel. 03-3203-5131
Fax. 03-3208-2157
<https://www.jasea.org/>

第38回 オートサービスショー2025

4万人超える来場で盛況

次世代モビリティと共に歩む整備機器



日本自動車機械工具協会（機工協、柳田昌宏会長）は6月19日（木）から6月21日（土）の3日間、東京ビッグサイト（東京都江東区）で「第38回オートサービスショー2025」を開催した。車両の電動化や自動運転化が進む中、開催テーマとして掲げた「次世代モビリティと共に歩む整備機器」の下、104社・8団体が出展。計4万324人が来場。会場は終日盛況に沸いた。

規模、来場者とも前回は上回る

出展者数は前回2023年開催比で10社・1団体増加。展示小間は同157小間増の1107小間と開催規模は前回実績を上回った。来場者数も同12・7%増となった。会場ブースではADAS（先進運転支援装置）対応機器、BP（鋳金塗装）関連機器など省力化・省人化に結びつく製品に注目が集まった。

規模、来場者とも前回は上回る

恒例の自動車整備セミナー（参加無料）は「自動運転車の現状と安全性基準の考え方」「工業高校の現状と進路」「自動車整備業界の展望の課題」次世代モビリティへの対応と働きやすい環境づくり「OBD検査における検査用スキャンツールの現状と今後について」の4本を準備。受講者数は計462人に上り、前回実績（6講座実施）を181人上回った。



多様な事前来場誘致策が奏功

機工協も事前来場誘致に積極的に取り組んだ。公式SNS（フェイスブック、インスタグラム）を立ち上げ、イベントの情報を発信したほか、YouTube、LINE、Googleディスプレイなどの媒体を通じて広告告知を展開。今年2月に東京ビッグサイトを開催された自動車アフターマーケット業界のイベント「第22回国際オートアフターマーケットEXPO」では機工協もブースを出展しオートサービスショーの開催告知活動に注力した。将来の自動車整備関連業界活性化を見据え、自動車整備大学・専門学校に加え、都内近郊の工業・工科高等学校の学生に対する来場誘致も前回に引き続き積極的に実施。会期中、約4500人（前回実績約1000人増）が来場した。今月初の試みとして「キャリアサポートコーナー」を設け、任意の出展企業ら社と自動車総合技術機構、軽自動車検査協会、機工協の3団体がブースを出展し、自動車整備業界や個人で働くことの魅力などを伝えた。

目立った海外からの来場

海外からの来場者数は1000人弱と前回比で2倍に増えた。国籍は18カ国に上った。上位4カ国は台湾、韓国、イタリア、中国で全体の55%を占める形となった。今回新たに日本貿易振興機構（JETRO）のウェブサイト「世界の見本市・展示会情報」に登録したことも要因の一つとして挙げられそう。出展したある機械工具商社の担当者は「海外企業からの提案や売り込みが例年になく多かった」と話しており、新たな商材、提案の掘り起こしにつながったようだ。

一般社団法人 日本自動車機械工具協会
会員各社

【正会員】

アベテック(株)

株アムテックス

株アルティア

安全自動車(株)

株イヤサカ

興和精機(株)

嵯峨電機工業(株)

株サンコー

株ダイイチ

東洋テック(株)

日平機器(株)

株バンザイ

ヤマト自動車(株)

株ユーコー・コーポレーション

株ローンチオートマーケティング

【特別会員】

Astemoアフター

マーケットジャパン(株)

株阿部商会

株インターサポート

ヴァリユー・トレーディング(株)

大塚メカトロニクス(株)

オートル・インテリジェント・

テクノロジ(株)

三栄電子機器(株)

スナップオン・ツールズ(株)

株スピーディ

株ツールプラネット

株司測研

ボッシュ(株)

株マツキ

株山形部品

会場レポート

EV、ADAS関連 多数の出展

「近未来の整備工場の実現と共創」をテーマとして掲げたアルティア（浜本雅夫社長、東京都中央区）は、整備工場の生産性向上やコンプライアンス（法令順守）対策につながる整備機器をブースに並べた。来場者の注目を特に集めたのが、電気自動車（EV）や先進運転支援システム（ADAS）に関するツールを集めた「EV車整備・ADASエリア」。EV用の「マルチサポーターーム」などを展示した同エリアでは実際の作業環境を再現。来場者が機器の使用感を想像しやすくなっており、好評だった。ステージで行った検査機器のデモンストレーションも注目を浴びた。

安全自動車（中谷宗平社長、同港区）は「メカニクにやさしい労働環境」を出展コンセプトに据えた。「車検機器」などのカテゴリを展開し、「省人省力化」「効率化」「安全作業」につながる商品やサービスを披露した。リフト事故防止の観点から開発した「リフト挟まれ防止センサー」は、リフト操作者の死角にいる人や物（作業台やタイヤなど）をセンサーで検知し、その下降を自動停止させるもの。既設リフトへの取り付けが可能で多くの来場者の目を惹いた。同社は災害時の「安全」にも目を向ける。このため、ブースでは外部に電力を供給する機能を持つレスキュー車「T救2号」を展示した。発電機とリチウムイオン電池を搭載した同車は、平時は駆動用電池の容量が無くなる「電欠」に対応し、災害時は非常用電源車として稼働する。自然災害は多発化・激甚化している。整備業界も備えが必須だ。

物価高や人件費の高騰が続く中、整備工場にとって収益性改善が課題だ。そのためには、顧客の困り込みや来店客にメリットのある提案ができる体制づくりが欠かせない。イヤサカ（今井祥隆社長、同文京区）は、これらを実現するための仕組みを「トータルバリューチェーン」と名付け、そのための商品やサービスを展示した。トータルバリューチェーンを実践できる省力化機器などが人気だった。ブースの一角では米ハンター社の「Ultimate ADAS」を参考出品。ホイールアライメントとエーミング（機能調整）を一台で行える最新機器は来場者の関心を集めた。



EV関連機器の展示が好評だったアルティアブース



米ハンター社「Ultimate ADAS」（イヤサカ）



多目的車両「T救2号」（安全自動車）



アムテックスが参考出品したエーミング機器



独ADI社「AD1 ピークスキャナー」（バンザイ）

省人・省力化、効率化、安全作業…

第38回 オートサービスショー2025



ボッシュもエーミング関連機器を展示



オーテル・インテリジェント・テクノロジーが披露した新製品

好評の検査機器デモンストレーション



楕円形の二輪車用リフト（興和精機）



インターサポートが展示したスキャンツール「ZⅡ」



サンコーブースに登場した新型タイヤチェンジャー

スキャンツールにも高い関心

今回のオートサービスショーで最も注目を集めた商品の1つが、エーミング関連機器だ。ADASの普及に伴い、整備の現場では正常に作動するためのエーミングを行う機器の重要性が年々高まっているためだ。

アムテックス（千田健二代表、埼玉県所沢市）は、ジョーン・ピーンとして初のエーミング機器を参考出品した。同商品はタイヤに取り付けた反射板によって距離を読み取る仕組みを採用。従来型と比較してターゲットを設置するための位置出しにかかる時間を大幅に削減したという。

オーテル・インテリジェント・テクノロジー（周秋芳社長、横浜市港北区）はエーミングとホイールアライメントを同時に実施できる「ZⅡ」のウェビナーも紹介した。

スキャンツール（外部故障診断機）への関心も高かった。インターサポート（高松晃貴社長、大阪府中央区）は、「GISCAN」シリーズの最新商品を並べた。技術研修会「G-TRAINING」のウェビナーも紹介した。

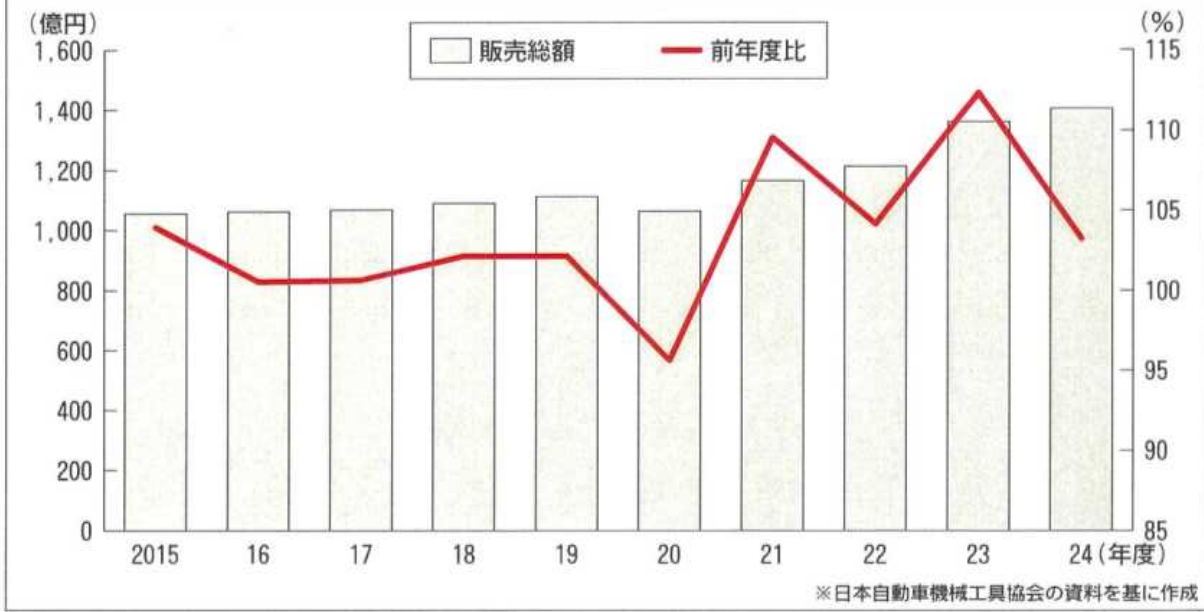
興和精機（渡部正健社長、同台東区）は、二輪車用リフトの新製品を展示した。二輪車用リフトの天板は長方形が一般的だが、新製品では作業のしやすさを考慮して楕円形を採用した。特徴的な形のリフトに興味を持ち、足を止める来場者も多かった。

テストが一体となった新製品「MaxiSys ADA S IA1000WA」を発表。ボッシュ（クリスチャン・メツカー社長、同都筑区）も、デジタル画像認識技術を採用して位置決めを容易にする機器を出展した。

興和精機（渡部正健社長、同台東区）は、二輪車用リフトの新製品を展示した。二輪車用リフトの天板は長方形が一般的だが、新製品では作業のしやすさを考慮して楕円形を採用した。特徴的な形のリフトに興味を持ち、足を止める来場者も多かった。

24年度の自動車機械工具販売実績

自動車機械工具総売上の推移



日本自動車機械工具協会（機工協、柳田昌宏会長）がまとめた2024年度の自動車機械工具の販売実績は、総売上金額が前年比3.2%増の1405億900万円と4年連続で増加した。1400億円超えは31年ぶり。過去5年間の好実績だった。整備業界共通の課題である車両の高度化や人手不足に対応した機器の需要が売上げを底上げしたとみられる。この傾向は今後も続く見込まれる。

生産量が回復 4年連続の増
国内販売は同2.3%増の1327億7900万円、輸出販売は同65.9%増の4億3800万円と大幅に増加した。一方、輸入販売は同10.7%減の32億9200万円だった。

31年ぶりの1400億円超え

2024年度 自動車機械工具販売実績

商品カテゴリー	販売金額	前年比増減率	構成比
リフト・ジャッキ・プレス	24,618,162	0.8	17.5
車検機器	14,479,901	1.6	10.3
洗車洗浄装置	10,889,797	8.6	7.8
自動車総合診断装置	9,833,288	17.7	7.0
ハンドツール	9,355,498	2.3	6.7
ブレーキ・ホイールサービス機器	7,180,000	▲0.3	5.1
ガレージ用一般機器	6,154,235	▲0.8	4.4
エンジン診断用機器	5,720,995	▲3.3	4.1
バッテリー・クーラーサービス機器	4,437,690	▲9.5	3.2
エアーコンプレッサー	3,572,422	2.3	2.5
空圧電動工具	2,958,176	▲2.7	2.1
注油脂機器	2,315,522	4.2	1.6
塗装機器	1,536,917	▲16.1	1.1
車体整備機器	1,325,177	▲20.0	0.9
環境整備機器	866,611	20.7	0.6
各種システム	536,319	2.3	0.4
エンジン整備用機器	497,403	▲4.5	0.4
ディーゼル用機器	44,232	▲3.9	0.0
その他	34,187,476	8.7	24.3
総合計	140,509,821	3.2	100.0

単位：千円、%。▲はマイナス
日本自動車機械工具協会の資料を基に作成

総合診断装置 18%の大幅増
商品カテゴリー別では全19項目のうち、10項目が前年度を上回った。売上金額が大きかったのは「リフト・ジャッキ・プレス」で、同0.8%増の246億1816万円だった。車検機器は1.6%増の144億7990万円、洗車洗浄装置は8.6%増の108億8979万円、自動車総合診断装置は17.7%増の98億3328万円と増加した。ハンドツールは2.3%増の93億5549万円、ブレーキ・ホイールサービス機器は0.3%減の71億8000万円、ガレージ用一般機器は0.8%減の61億5423万円、エンジン診断用機器は3.3%減の57億2099万円、バッテリー・クーラーサービス機器は9.5%減の44億3769万円、エアーコンプレッサーは2.3%増の35億7242万円、空圧電動工具は2.7%減の29億5817万円、注油脂機器は4.2%増の23億1552万円、塗装機器は16.1%減の15億3691万円、車体整備機器は20.0%減の13億2517万円、環境整備機器は20.7%増の866611円、各種システムは2.3%増の536319円、エンジン整備用機器は4.5%減の497403円、ディーゼル用機器は3.9%減の44232円、その他は8.7%増の34億187476円だった。

総売上金額はコロナ禍前の19年度と比較すると、293億3800万円増えた。コロナ禍で供給に混乱が生じた半導体などの部品調達が生じた半導体などの部品調達が正常化したことで、機械工具の生産が回復して販売量が拡大。また、コスト高を受けた価格転嫁が進んだことも、売上金額の底上げにつながったとみられる。

7%増の98億3300万円。100億円には届かなかったものの、調査開始以来、過去最高を記録した。省力化や作業品質の向上を目指す整備事業者の導入事例が多かった。カーメーター向けについては数量が減少したものの、車両の高度化に対応したマルチ機能への需要が高まり、金額ベースでは前年比で12億円増加した。

車両の大型化や車重がかさむ電気自動車（EV）など幅広い車両に対応する高性能品の販売が増えている。加えて埋設2柱式からパンタグラフ式へのシフトも要因となっている。設置工事費用や故障時の修理性に優れており、この傾向はしばらく続くようだ。

「ブレーキ・ホイールサービス機器」は同2.7%減の71億8000万円と微減に推移。タイヤチェンジャーについて、タイヤの大型化、低扁平化によりディーラーを中心に代替が進んだ模様だ。また、24年10月にOBD（車載式故障診断装置）検査の本格運用が始まった。これに必要な外部故障診断機（スキャンツール）本体の売上金額は同7.1%減の41億4900万円だったが、スキャンツール診断ソフトは同15.7%増の7億4500万円に伸びた。本格運用前に本体を購入した整備事業者で、ソフトウェアの更新が続いたことがうかがえる。機工協では「ユーザーは、ソフト更新などにより中長期でどう対応できるかを重要視している」とし、「メーカーがその状況を考慮して製品開発した結果ではないか」と分析している。

「高度化」「人手不足」対応機器が好調

